福井神社の技術や意匠学ぶ

市川工大教授を招き研修会

県コンクリート診断士会

福井県コンクリート診断士会（石川裕夏会長）は23日、福井市の福井県教育センターで「戦後福井の復興とコンクリート技術・意匠の可能性に関する研修会～五十嵐直雄設計『福井神社1957』から学ぶ～」を、開催した。

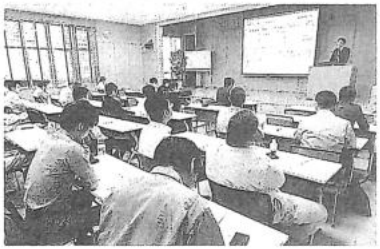
正・賛助会員ら約60人が参加。今回は、現・坂井市生まれで福井大学工学部長や学長などを務めた建築家の故・五十嵐直雄氏の設計により1957年に再建された総コンクリート造りの福井神社にスポットを当てて、戦後福井の復興に向き合った先人たちの熱き取り組みに思いを馳せた。講師に福井神社を再評価するための学術調査に関わった福井工業大学建築土木工学科の市川秀和教授を招いた。

開会に先立ち、石川会長は、「福井神社をはじめとする歴史的建造物は、いずれ維持管理や改修工事を行わざるを得ない場合があることも想定される。建造時の設計者や施工者の思いなどを理解して先人たちの知恵と工夫、理念や考え方を後世にしっかり伝えていくのが我々技術者の使命」などとあいさつ。

続いて座学研修に入ると市川教授は、五十嵐氏が東京帝国大学建築学科を同期生の丹下健三や大江宏らと卒業したこと、設計を手がけた福井市体育館や福井大仏など現存する建築物の代表作を紹介。また、五十嵐氏が遺した「真壁（しんかべ）の意匠」2冊の内容を高く評価した。

さらに、市川教授は総ヒノキ造りの社殿が創建からわずか2年後に戦災で焼失した福井神社の再建に向け、五十嵐氏がどのように社殿配置したのかを学生と実測・調査した結果を報告するとともに、社殿の全体配置を黄金比や正方形による幾何学的構成から創り出していることなどを解説。質疑で市川教授は今後の取り組みについて「学術的な調査を積み重ね、さらに情報発信したい」と意欲を示した。

その後、参加者は福井市大手に佇む福井神社に移動し、市川教授の好意により拝殿内部を特別に見学した。参加者は天井を見上げ、柱との間に組み込まれたフレームのないガラスにより、天井が浮いているように見せる斬新なアイデアや技術力の高さに感動していた。



福井神社で用いられたコンクリート技術や意匠の可能性を習得した研修会㊤と市川教授参加による見学会＝福井市内